

## 米国（ハワイ）大学進学事情

G30 IPC 高部英明

（本記事は阪大国際化情報誌（仮）のために書いたものである。2012.12.12）

親しくしている阪大インターナショナル・カレッジの大西副カレッジ長から「ハワイの高校で G30 の説明会を行うので、ハワイ大学での説明会も企画して同行しませんか」と誘いがあった。ハワイには日系人が多いことから、ハワイ大学の学生なら自分のルーツを求めて日本の大学や大学院に来る可能性は高いと単純に考え、快諾した。同時に、大西さん達がマウイ島では私立高校 2 校を訪問するのでそれにも同行し、米国の高校事情も知りたかった。

ハワイ大学には直接知り合いがないので、米国の共同研究者多数に「ハワイ大学の物理に知り合いいませんか」とメールで聞いた。が、いるという返事は来ない。そこで、ハワイ島のマウナケア頂上 4200m にある「すばる天文台」を思い出し、国立天文台の前台長に現地教員を紹介していただいた。そうして知り合った林さんのお陰で、物理・天文学科研究科長の Pui Lam 教授を紹介していただいた。日程が高校訪問の関係で決まっており、予定の翌日なら学生達との時間を設定できると言われたが、前日に訪問することにした。ハワイ大学の宇宙物理研究所で私の研究の講演と教員との面談を行った。Lam 教授が学生達には配布物を配り、説明してくれることになった。

高校訪問は、Iolani 高校（写真 1）と Punahou 高校（写真 2）を訪問。米国では高校まで義務教育であり、ホノルルのあるオアフ島にも沢山の公立高校がある。義務教育だから授業料は無料。それでも、私立高校が 5 つある。Punahou 高校はオバマ大統領の母校として有名（写真 3）。成績上位 10% 程度が奨学金を受給しており、オバマも奨学生であったそうだ。この高校の年間授業料 19,200 米ドル（約 180 万円）を出しても私立に行かせる親は多い。人種別統計が記されていたが、アジア系が 60% と多く、白人は 5% と書いていた。米国の伝統的な親は高校までは子供は同居させ育てる義務があるが、大学からは自分で稼いで入学するか、奨学金を獲得しなさいというのが普通だそうだ。私のアリゾナ時代の友人も「大学院に入学するためにタクシーの運転手をして事業料を貯めた」と言っていた。その点、アジア系は少数民族でもあることも一因と思うが、子供には教育という財産しか残してあげることが出来ない、と考えて、教育熱心になる。

米国の大学授業料も高い。年間授業料はハーバード大学が 3.4 万ドル、イエール大学が 4 万ドル、州立のカリフォルニア大学でも約 1 万ドル（州内）か約 3 万ドル（州外）と記憶している。阪大 G30 の IPC(国際物理特別コース)で修士を終えて、この夏からイエール大学の博士課程に編入した院生は、教授との面談で良い成績を挙げ、授業料免除と年額 3 万ドルの奨学金（返却義務なし。給料）

を得た。UC サンディエゴ校からもオファーがあったが、条件の良いイェールを選んだようだ。ただし、これが保証されているのは 1 年間。したがって、一生懸命、勉強・研究に励まないと、教授からの評価が下がり、次年度は特典を受けられず、退学を余儀なくされる可能性がある。必然的に、皆、頑張る。博士課程は 1 年契約の社員だと思えばわかりやすい。25-27 才にもなるのだから社会人としての自覚を持ち、プロになれということだ。

さて、高校に戻ろう。高い授業料を要求するだけあって、教育内容は充実している。まず、驚くのが、一クラス 16 人と少数教育であること。先生が目が全員に行き渡る。両校には日系も沢山いた。Punahou 高校では日本語コースで勉強している授業に参観した（写真 4）。「千と千尋の神隠し」の脚本を教材に、生徒がまず、日本語で音読し、意味を英語で答える。おばあさんのしゃべり口など難しい表現も敢えて勉強させている（写真 5）。

先生は日本人の方で、豊中が実家。米国の方と結婚し、ここに住んでいる。このクラスは日本の高校ともネットなどで交流しており、音楽で有名な大阪の夕陽丘高校と合同で作曲・演奏のプログラムを進めている。他にも 2 校と別のプログラムを進めている。授業の後、先生と話しをした。阪大が英語コースを開始していることに驚くと同時に、「実家が近いので、人ごととも思えない。何でも協力します」と約束してくれた。

両校で驚くのは、立派な進路指導室があることだ（写真 6）。そこには学生がゆったりと大学調べが出来るテーブル、椅子がたくさんあるのと同時に、米国の大学のペナントが壁全体を埋めている（写真 7）。そして、「Director of College Counseling」という肩書きの進路指導の先生が常駐し、生徒の進路相談に対応する。その結果かどうか不明だが、米国の 149 の大学に進学している。やはり一番多いのはハワイ大学だが、そんなに多くはない。これだけ多くの大学に分散するというのは、独立心の表れと言える。宣伝活動せずとも高校生が入学したいという日本の一流大学の事情と異なり、米国はまさに優秀な学生の獲得合戦である。そのためどここの大学も高校の進路指導の先生に説明に行き、ペナントや大学の詳しい資料を展示してもらう。

米国の大学入学試験は SAT (Scholastic Assessment Test) と呼ばれる年 7 回受験可能な統一試験。科目は英語（国語 2 教科：Critical Reading、Writing）と数学の合計(800x3 点満点)。この点数と、その他、社会貢献などが合否を決める。7 回の内、一番良い点数で大学に応募する。7 年ほど前、シリコンバレーに住んでいる友人が入試事情を教えてくれた。SAT の学校別平均点は地元の新聞で公開されるようだ。そして、SAT の平均点が高い高校の近くは地価が上がるということ。どこも、受験熱心。また、Stanford 大学をむかし尋ねた際、大学新聞を読んでいたなら「我が校は、今回の SAT 試験で全米 200 位までの高校生に授業料免除、奨学金支給の招待状を送った」と書いていたのを覚えている。資金力のある大学は、優秀な学生を沢山集め、大学の評価を高め、優秀な卒業生が大学に多額の寄付をすることでさらに強くなる。まさに、米国経済と事情は似通う。日本の大学の国際化はこのようなグローバル標準と競争して行かなくてはならない。現実の厳しさを再確認させられた。

作家の山崎豊子が『二つの祖国』（写真8）を執筆する際、「1978年秋、ハワイ大学客員教授に招聘された機会を生かし、講義の合間に、移民史、日系人収容所関係の基礎資料を勉強し、日系一世、二世の方々の体験談をきた」そうである。真珠湾、相手を殺さない語学兵、ヒロシマ、東京裁判など日系二世一家が戦争の嵐の中でいずれの国を祖国として生きていくべきか苦悩し、翻弄される姿を描いている。10年以上前、私もその長編を読んで感動した。その彼女が最近刊行した「山崎豊子、自分を語る」というシリーズの文庫本で「ハワイ大学は東洋研究分野は全米で屈指と有名であったが、ハーバード大学が資金力にものを言わせ優秀な人材を引き抜いたりしたため、今ではハーバードが本分野の全米一位になってしまった」と書いていた。弱肉強食。生き残るために全米の高校から優秀な人材を資金力で獲得する。

そんな現実も認識せずに、のこのこと「大阪大学の英語コースに入学するように進路指導してください」と出かけたわけである。持参したのはG30のパフレット。さて、どんな生徒が目を通してくれるやら。当然、大阪大学の目立つ「ペナント」を作成し、G30の大きな魅力的ポスターや大学紹介の英語版をG30に焦点を当てて編集し、それらをまずはハワイの私立5校に送って、進路指導の先生に生徒が阪大で学ぶ魅力を理解していただかないといけない。これが、全米の大学がまずはしていることであり、阪大もこれに追いつくことから始めなければいけない。いや、米国の先に行くにはペナントではなく、「大阪大学天井画」を裏が粘着できるようにして送るくらいのことをしないとイケない。米国では優秀な生徒を獲得することは大学の最大の関心事であり、そのために投資している。「日本だから」、「良い大学だから」が通用するのはアジアの一部の途上国くらいである。孫子ではないが「相手を知り、己を知る」こと無くして目的達成は成し難し。

ハワイの大学院進学事情は次の機会に書くことにして、ひとまず、高校進学事情の報告を終えたい。

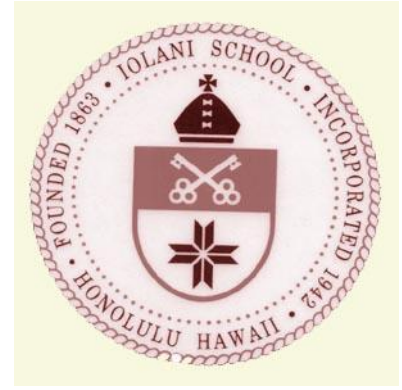


写真 1 : Iolani 学校全景。右は校章。

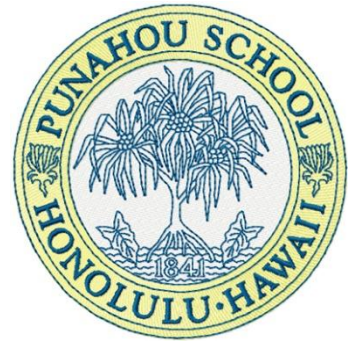


写真 2 : Punahou 学校。右は校章。



写真 3 : Punahou 高校時代のオバマ。



写真4：Punahouの日本語コース、授業風景。右手前は阪大・North氏。

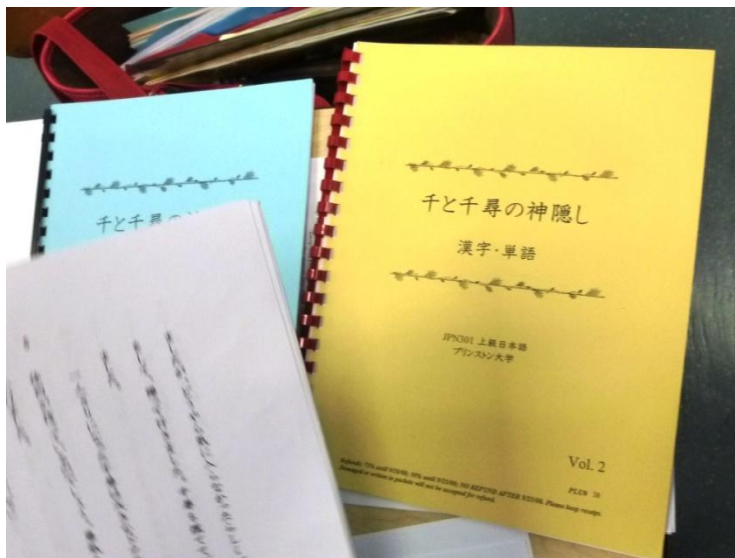


写真5：教材の「千と千尋の神隠し」。



写真 6 : Ionani School の進路相談室、

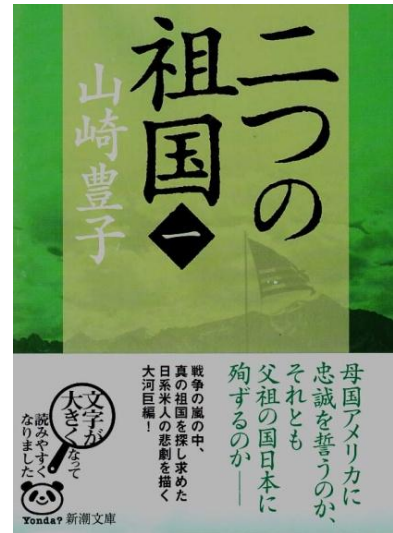


写真 8 : 山崎豊子著「二つの祖国」



写真 7 : Punahou School の進路相談室。